

二葉亭追録

内田魯庵

青空文庫

一 二葉亭が存命だったら

二葉亭が存命だったら今頃ドウしているだろう？ という問題が或る時二葉亭を知る同士が寄合よりあった席上の話題となった。二葉亭はとても革命が勃ぼつ発ぱつした頃まで露都に辛抱していなかったらうと思うが、仮に当時に居合わしたとしたら、ロマーノフ朝に味方したろう乎か、革命党に同感したろう乎、ドツチの肩を持つたらう？ 多恨の詩人肌から亡朝の末路に薤露かいろうの悲歌を手向たむけたらうが、ツアールの悲惨な運命を哀あい哭こくするには余りに深くロマーノフの罪惡史を知り過ぎていた。が、同時に入露以前から二、三の

露国革命黨員とも交際して渠かれらの苦辛や心事に相應の理解を持つていても、もろて双手を挙げて渠らの革命の成功を祝するにはまた余りに多く渠らの陰謀史や虐殺史を知り過ぎていた。

二葉亭の頭は根が治国平天下の治者思想で叩たたき上げられ、一度は軍人をも志願した位だから、ヒューマニチーの福音を説きつつもなお権力の信仰を把持して、『*Might is right*』の信条を忘れなかつた。貴族や富豪に虐げられる下層階級者に同情していても権力階級の存在は社会組織上止むを得みざるものと見做し、渠らに味方しないまでも呪咀じゆそするほどに憎まなかつた。

二葉亭はヘルチエンやバクーニンを初め近世社会主義の思想史にほぼ通じていた。就なかんずく中ヘルチエンは晩年までも座辺から全

集を離さなかつたほど反覆した。マルクスの思想をも一と通りは
わきま弁えていた。が、ひつきよう畢竟は談理を好む論理遊戲から愛読したの
 で、理解者であつたが共鳴者でなかつた。書斎の空想として興味
 を持つても実現出来るものともまた是非実現したいとも思つてい
 なかつた。かえつてこういう空想を直ちに実現しようと猛進する
 革命党や無政府党の無謀無考慮無けいりん綸を馬鹿にし切つていた。
 露都へ行く前から露国の内政や社会の状勢については絶えず相応
 に研究して露国の暗流に良く通じていたが、露西亜の官民の断え
 ざる衝突に対して当該政治家の手腕器度を称揚する事はあつても
 革命党に対してはトンと同感が稀うすく、渠らは空想にばかり俘とらわれ
 て夢遊病的に行動する駄々ツ子のようなものだから、時々は灸きゆうを

据^すえてやらんと取締りにならぬとまで、官憲の非違横暴を認めつつもとにかくに官憲の肩を持つ^{みかた}看方をした。

「露西亜は行詰っているが、革命党は空想ばかりで実行に掛けたらカラ成っていない。いくらヤキモキ騒いだって海^{うみ}千^{せん}山^{やま}千^{せん}の老巧手だれの官僚には齒が立たない、」と二葉亭は常に革命党の無力を見^み縊^{くび}り切っていた。歐洲戦という意外の事件が突発したためという条、コンナに早く革命が開幕されて筋書通りに、トいうよりはむしろ筋書も何にもなくて無準備無計画で初めたのが勢いに引摺られてトントン拍子にバタバタ片附いてしまおうとは誰だつて夢にだも想像しなかったのだから、二葉亭だつてやはり、も^{ぞんじよう}存^{ぞんじよう}生^{ぞんじよう}だつたら地震に遭^あ逢^ひしたと同様、暗^{くら}黒^{やみ}でイキナリ

頭をドヤシ付けられたように感じたろう。

が、二葉亭は革命党の無力を見縊つていても、その無思慮な軽率なヤリ口に感服しなくてもまるきり革命が起るのを洞観しないじゃなかった。「露西亞は今噴火坑上に踊つてゐる。幸い革命党に人物がないから太平を粧よそおつていられるが、何年か後には必ず意外の機会から全露を大混乱に陥れる時がある」とはしばしば云いい云いした。「その時が日本の驥足きそくを伸ぶべき時、自分が一世一代の飛躍を試むべき時だ」と 畑水はたけすい練れんの気焰きえんを良く挙げたもんだ。

果然革命は歐洲戰を導火線として突然爆発した。が、誰も多少予想していないじゃないが余り迅雷疾風のだったから誰も面喰めんくらつてしまった。その上、東京の地震の火事と同様、予想以上に大

きくなつたのでいよいよ面喰つてしまった。日本は二葉亭の注文通りにこの機会に乗じて驢足を伸べるどころか、火の子を恐れて縮こまつて手も足も出ないでいる。偶々たまたまチヨツカイを出しても火傷やけどをするだけで、動ややともすると野次馬やじうま扱いされて突飛ばされたりドヤされたりしている。これでは二葉亭が一世一代の芝居を打とうとしても出る幕がないだろう。

だが、実をいうと二葉亭は舞台監督が出来ても舞台で踊る柄がらではなかった。縦令たとい舞台へ出る役割を振られてもいよいよとなつたら二の足を踏むだろうし、踊つて見ても板へは附くまい。が、寝言ねごとにまでもこの一大事の場合を歌っていたのだから、失やりそこな敗ううまでもこの有史以来の大動揺の舞台に立たして見たかつた。

ヨツフエが来た時、二葉亭が一枚会合に加わっていたらドウだ
 ったろう。あの会合は本尊が私設外務大臣で、双方が探り合いの
 ダンマリのようなもんだったから、結局が百ひやくにちかずら日あおくま鬘あおくまと青隈
 の公卿くげあく悪の目を剥むくにらみあ睨みえ合みえいみえの見得で幕となつたので、見物人は
 イイ氣持みとに看惚みとれただけでよほどな看功みこう者しやでなければドツチが
 上手か下手か解しららなかつた。あアいう型はまに陥おおかぶきつた大歌舞伎では型
 の心得しろうとのない素しろうと人役者では見得を切おおもむこつて大向おおもむこうをウナらせる
 事は出来ないから、まるきり型ふりごとや振事ふりごとの心得のない二葉亭では
 舞台に飛出しても根ツから栄はえなかつたろうが、沈しんいけい惟敬しんいけいもどき
 の何とかいう男がクロンボを勤めてるよりも舞台を引緊めたであ
 ろう。

とは思ふものの、二葉亭は舞台の役を振られて果して躍り出す
 だろう乎。空想はかなり大きく、談論は極めて鋭どかつたが、率
 ぎ問題にブツかろうとするとカラキシ舞台度胸がなくて、存外※
そしゅんじゅん咀逡巡して容易に決行出来なかつた。実行家となるには二葉
 亭は余りに思慮が細か過ぎた。右から左から縦から横から八方か
 ら只見とみうこう見て卯うの毛で突いたほどの隙もないまでに考え詰め
 てからでないといへども実行出来なかつた。実行家の第一資格たる
 向う見ずに猪突ちよとつする大胆を欠いていた。勢い躍り出すツモリで
 いても出遅れてしまう。機会は何なんたび度来ても出足が遅いのでイツ
 モ機会を取逃がしてしまふ。存命していても二葉亭はやはりとつ
 おいつ千思万考しつつ出遅れて、可あつたら惜多年一剣を磨した千載せんざい

の好機を逸してしま^いうが落^{おち}であるかも知らん。

が、それでも活^いかして置きたかつた。アレカラ先き当分露国に滞留して革命にも遭逢し、労農政府の明暗両方面をも目^も睹^としたなら、その露国観は必ず一転回して刮^か目^{つもく}すべきものがあつたであらう。舞台の正面を切る役者になるならぬは問題でなくして、左^とに右^かく二葉亭をしてこの余りに大き過ぎて何人にも予想出来なかつた露西亞の大變動に直面せしめたかつた。

二 二葉亭は実は旧人

二葉亭は露国文化の注入者としては先駆者であつた。プーシキ

ンやゴンチャローフやドストエフスキーや露西亜の近代の巨星の
 名めいじゅう 什たんどくを耽讀したのが四十年前で、ツルゲーネフの斷章を初
 めて日本に翻訳紹介したのが三十六年前であつた。その頃は日本
 ばかりでなくてヨーロッパ欧羅巴ですらが露西亜を北欧の半開民族視して
 いたから、露西亜の文化なぞは問題とならなかつた。露西亜の文
 学がポツポツ欧羅巴の大陸語に翻訳され出したのはやはり同じ頃
 からで、何一つ欧羅巴に遅れを取らないものはない日本の文化事
 業の中でただ一つ露西亜の文学の紹介に率先たとい（縦令その後を続け
 るものが暫らくなかつたにしろ）したというは二葉亭あつたがた
 めであつた。

が、新らしい露西亜の文芸の研究者、精通者、紹介者としては

二葉亭は実に輝いた先駆者であつたが、元來露西亞の思想なるものは極めてオーソドックスな官僚的階級差別心と頗る放縱なユーロピヤ的空想とあるのみで、近代自由思想の糧とすべきものに乏しかつたから、二葉亭は芸術的に露西亞の勝れた世界的大作に負う処があつても思想的に露西亞から学ぶべき何物をも与えられなかつた。^{したが}随つて少年時代から魏叔子や陸宣公で^{つちか}培われた頭は露西亞の文学の近代的氣分に触れてもその中に盛られた自由思想を容れるには余りに偏固になり過ぎていた。

二葉亭が小説家型よりは国士型であるというは生前面識があつた人は皆認める。この国士型というは維新前後から明治初期へ掛けての青年の通有であつて、二葉亭に限らず同年配のものは皆国

士を理想とした。本党の床次とこなみ、現閣の浜口、皆学校時代から国士を任じていた。当時の青年が政治に志ざしたのは皆国士を標的としたからで、坪内博士の如く初めから劇や小説を生涯の仕事とする決心で起たつたものは異数であつた。徳富蘆花とくとみろかが『ほととぎす』に名を成した後の或る時「我は小説家たるを恥とせず」とポロ口擬もどきに宣言したのはやはり文人としての国士的表現であつた。町人宗の開山福沢翁ふくざわが富の福音を伝道しつつも士魂商才を叫んだ如く、当時の青年はコンパスや計算尺を持つ技師となつても、前ま垂掛えだれがけで算盤そろばんを持つても、文芸に陶醉してペンを持つても、国士という桎梏しっこくから全く解放されたものは先ずなかつた。身、欧羅巴の土を踏んで香水氣分に浸つたものでも頭の中では上かみしも下

を着て大小を佩^さしていた。

二葉亭もやはり、夙^{はや}くから露西亞の新らしい文芸の洗礼を受けていても頭の中では上下を着て大小を佩^さしていた。聡明の人だから近代思想にも十分な理解を持っていたが、若い自由な思想に活きるよりはヨリ以上に国土的壮図の夢を見ていた。文学的天才に恵まれていながら文学に氣乗りがせず、トルストイやドストエフスキーの偉大を認めつつも較^ややもすれば輕侮する口氣を洩^もらし、文学の尊重を認めるという口の下から男子畢^{ひつせい}世の業とするに足るや否やを疑うという如きは皆国士の惡夢の囈^{うわごと}語であつた。

二葉亭は児供^{こども}の時は陸軍大將を理想として士官学校を志願までした。不幸にして不合格となつたので、軍人を断念して外交方面

へ方向を転じたが、学校が思うようにならず、その上に一家の事情が纏綿てんめんして、三方四方が塞がったから仕方がなしに文学に趨はしつたので、初しよいち一念ねんの国士の大望は決して衰えたのでも鈍つたのでもなかった。語学校に教授を執つた時もタダの語学教師たるよりは露西亞を対照としての天下国家の経綸けいりんを鼓吹したので、松下村塾の吉田松陰を任じていた。それ故に同じ操觚そうこでも天下の木鐸くたくとしての新聞記者を希望して、官報局を罹やめた時既に新聞記者たらんとして多少の運動をもした位だから、朝日の通信員として露西亞へ上途した時は半世の夙志しゆくしが初めて達せられる心地がして意気満盛、恐らくその心事に立入って見たら新聞通信員を踏ふみだい台として私設大使を任ずる心持であつたろう。が、二葉亭の頭

は活きた舞台に立つには余りに繊細煩瑣はんさに過ぎていた。北京ペキンに放浪して親友川島浪速の片腕となつて亜細亞アジアの経綸を策した時代は恐らく一生の中の得意の絶頂であつたろうが、余りに潔癖過ぎ詩人過ぎて、さしたる衝突もないのに僚友の引留むるを振払つて帰朝してしまった。川島は満洲朝の滅亡と共に雄図蹉跎さたし、近くは直隸軍の惨敗の結果が宣統帝の尊号褫奪ちだつ宮城明渡しとなつて、時事日に非なりの感に堪えないで腕を扼やくしているだろうが、依然信州の山河に盤踞ばんきよして岬くうを負うの虎の如くに恐れられておる。渠は実に当世に珍らしい三国志的人物であるが、渠と義を結んで漢の天下を復する計を立つるには二葉亭は余りに近代的思想を持ち過ぎていた。シカモ近代人となるにはまた余りに古風な国士的風

懷があり過ぎていた。この鳥にも獸にもドツチにもなり切る事が出来ない性格の矛盾が何をするにも二葉亭のキヤリヤの障^{しょうがい}碍^{がい}となつた。

二葉亭と交際した二十年間、或る時は殆^{ほと}んど毎日往来した。終日あるいは夜を徹して語り明かした事もあつた。が、お互いの打明けた談合の外は話題はイツデモ政治談や對外策、人生問題や社会問題に限られて滅多に文学に触れなかつた。偶々文学談をしてもゴーゴリやツルゲーネフでなければ芭蕉や西^{さいぎよう}行^{ぎやう}、京伝や三馬らの古人の批評で、時文や文壇の噂^{うわさ}には余り興味を持たなかつた。どうかすると紅葉や露伴や文壇人の噂^{うわさ}をする事も時^{とき}偶^{たま}はあつたが、舞台の役者を土間^{どま}や棧敷^{さじき}から見物するような心持でいた。

『浮雲』以後は暫らく韜晦^{とうかい}して文壇との交渉を絶ち、文壇へ乗出す初めに提携した坪内博士とすら遠ざかっていた。が、再びポツポツ翻訳を初めてから新聞雑誌記者や文壇人が頻^{ひんぱん}繁^{はん}に出入し初めた。二葉亭が二度の文人生活を初めたのは全く糊口^{ここう}のためで文壇的野心が再燃したわけではなく、ドコまでもシロウトの内職の心持であつた。本職の文壇人として、舞台あるいは幕裏のあるいは楽屋^{がくや}の人間として扱われるのを痛く^{ひど}イヤがっていた。「文壇の名士が来てはツルゲーネフのトルストイのと持掛けられるにはクサクサする」と苦り切っていた。

『浮雲』を書いた時は真に血みどろの真剣勝負であつた。『あいびき』や『めぐりあい』を訳した時は一刀三礼の心持で筆を執つ

ていた。それにもかかわらず、後には若氣わかげの過失あやまちで後悔して
るといった。自分には文学的天分がないと謙下へりくだりながらもとか
くに大天才と自分自身が認める文豪をさえ茶かすような語氣があ
った。万まんざら更文学の尊重を認めないどころか、現代文化における
文芸の位置を十分知り抜いているくせに、頭の隅のドコかで文学
を遊戯視して男子畢世の業とするに足るか否かを疑っていた。二
葉亭の理智の認める処を正直にいわせれば世界における文学芸術
の位置などは問題ではないのだが、儒教や武家の教養から文芸を
ちようちゆう
彫虫末技視して輕侮する思想が頭の隅のドコかに粘り着へばいて
いて一生文人として終るを何となく物足らなく思わした。ゴーゴ
リやツルゲーネフの洗礼を受けても魏叔子や陸宣公で鍛きたえ上げた

思想がイツマデも抜け切らないで、二葉亭の行くべき新らしい世界に眼を閉ざさした。二葉亭は近代思想の聡明な理解者であつたが、心の底から近代人になれない旧人であつたのだ。

三 二葉亭は長生きしても終生煩悶の人

それなら二葉亭は旧人として小説を書くに方^{あた}つても天下国家を揮^{ふりまわ}廻しそうなもんだが、芸術となるとそうでない。二葉亭の対露問題は多年の深い研究とした夙^{しゆくせき}昔の抱負であつたし、西伯^{シベ}リアから満洲を放浪し、北京では中心舞台に較^やや乗出していたし、実行家としてこそさしたる手腕を示しもせず、また手腕がなかつ

たかも知れぬが、頭の中の経綸は決して空疎でなかった。もし小説に仮托するなら矢野龍溪や東海散士の向うを張つて中里介なかざとかいざ山と人気を争うぐらいは何でもなかったろう。二葉亭の頭と技術とを以て思う存分に筆を揮つたなら日本のデュマやユーゴーとなるのは決して困難でなかつたろう。が、芸術となると二葉亭はこの国士的性格を離れ燕えんちよう趙悲歌的傾向を忘れて、天下国家的構想には少しも興味を持たないでやはり市井情事のデリケートな心理の葛藤かつとうを題目としている。何十年来シベリヤの空を睨にらんで悶々もんもん鬱勃うつぼつした磊塊らいかいを小説に托して洩らそうとはしないで、家常茶飯的の平凡な人情の紛糾に人生の一齣いちれんを探して描き出すうとしている。二葉亭の作だけを讀んで人間を知らないものは恐

らく世間並の小説家以上には思わないだろうし、また人間だけを
知つてその作を読まないものは、二葉亭を小説家であると聞いて
必ず馬琴の作のようなものを聯想せずにはいられないだろう。

こうした根本の性格矛盾が始終二葉亭の足蹟に累を成していた。

最^も一つ二葉亭は洞察が余り鋭ど過ぎた、というよりも総てのもの

を畸^{きけいてき}形的立体式に、あるいは彎曲的螺旋^{らせんしき}式に見なければ気が

済まない詩人哲学者通有の痼癖^{こへき}があつた。尤もこういう痼癖がし

ばしば大きな詩や哲学を作り出すのであるが、二葉亭もまたこの

通有癖^{わづら}に累いされ、直線に屈曲を見出し平面に凹凸を捜し出して

苦^{くるし}んだり悶^{もん}いたりした。坦^{たん}々砥^{たん}の如き何間幅^{げんはば}の大通路を行く時

も二葉亭は木の根岩^{いわかど}角^{でこぼこ}の凸凹した羊腸折^{つづらおり}や、刃^{やいば}を仰向けた

ような山の背を縦走する危険を聯想せずにはいられなかった。日常家庭生活においても二葉亭の家庭は実の親子夫婦の水不入^{みずいらず}で、シカモ皆好人物揃い^{ぞろ}であつたから面倒臭いイザコザが起るはずはなかつたが、二葉亭を中心としての一家の小競合^{こぜりあ}いは絶間^{たえま}がなく、バンコと苦情を聴かされた。二葉亭の言分^{いいぶん}を聞けば一々モツトモで、大抵の場合は小競合いの敵手の方に非分があつたが、実は何でもない日常の些事^{さじ}をも一々解剖分析して前後表裏から考えて見なければ気が済まない二葉亭の性格が原因していた。一口にいえば二葉亭は家庭の主人公としては人情もあり思遣^{おもいやり}も深かつたが、同時に我儘^{わがまま}な氣難^{きむず}かし屋であつた。が、二葉亭のこの我儘な氣難かし屋は世間普通の手前勝手や肝癪^{かんしゃく}から来るの

ではなくて、反覆熟慮して考え抜いた結果の我儘であり気難かし屋であつたのだ。

二葉亭は一時哲学に耽^{ふけ}つた事があつたが、その哲学の根柢は懷疑で、疑いがあるから哲学がある、疑いがなくて仮定の名の下に或る前提を定めて掛るなら最うドグマであつて哲学でないといつていた。が、一切の前提を破壊してしまつたならドコまで行つても思索は極まりなく、結局は出口のない八幡^{やわたし}知らずへ踏込んだと同じく、一つ処をドウドウ廻^{めぐ}りするより外はなくなる。それでは阿波^{あわ}の鳴門^{なると}の渦^{うず}に巻込まれて底へ底へと沈むようなもんで、頭の疲れや苦痛に堪え切れなくなつたので、最後に盲亀^{もうぎ}の浮木^{ふぼく}のよう^{とりつか}に取^と捉^とまえたのが即ちヒューマニチーであつた。が、根柢^{よこた}に構

わつてるのが懷疑だから、動ややともするとヒューマニチーはグラグラして、命の綱と頼むには手頼たより甲斐がなかつた。けれども大おお船ねに救い上げられたからツて安心する二葉亭ではないので、板い子たご一枚でも何千噸トシ何万噸マンの浮フロート城チング・キャッスルでも、浪と風との前には五十歩百歩であるように思えて終に一生を浪のうねうねに浮きつ沈みつしていた。

政治や外交や二葉亭がいわゆる男子畢世の業とするに足ると自ら信じた仕事でも結局がやはり安住していられなくなるのは北京ぜんてつの前あきら轍ぜんてつに徴しても明かである。最後のペテルスブルグ生活は到着びようが早々病臥して碌々見物もしなかつたらしいが、仮に健康でユルユル観光もし名士との往来交歓もしたとしても二葉亭は果して

満足して得意であつたろう乎^か。二葉亭は以前から露西亞を礼讃していたのではなかった。来て見れば予期以上にいいいよ幻滅を感じて、案外与^{くみ}しやすい独活^{うど}の大木だとも思い、あるいは箍^{たが}の弛^{ゆる}んだ桶^{おけ}、穴^あの明いた風船玉のような民族だと愛想を尽かしてしまうかも知らない。当座^{うち}の中こそ訪問や見物に忙がしく、夙昔の志望たる日露の問題に気焰を吐きもしようし努力もするだろうが、暫らくしたら多年の抱懷や計画や野心や宿望^{すべ}が総て石^{シャ}罈^{ボン}玉^{だま}の泡のように消えてしまつて索然とするだろう。歐洲戦が初まる前までも辛抱出来なくなるだろう。

所詮^{しよせん}二葉亭は常に現狀に満足出来ない人であつた。絶間なく

跡から跡からと煩悶を製造しては手玉に取つてオモチャにする人であつた。二葉亭がかつて疑いがあるから哲学で、疑いがなくなつたら哲学でなくなるといった通りに、悶えるのが二葉亭の存在であつて、悶えがなくなつたら二葉亭でなくなる。命のあらん限り悶えから悶えへと一生悶えを追つて悶え抜くのが二葉亭である。『浮雲』の文三が二葉亭の性格の一部のパーソニフィケーションであるのは二葉亭自身から聴いていた。煩悶の内容こそ違い、二葉亭はあの文三と同じように疑いから疑いへ、苦みくるしから苦みへ、悶えから悶えへと絶間なく藻掻もがき通していた。これが即ち二葉亭の存在であつて、長生きしたからつて二葉亭の生涯には恐らく「満足」や「安心」や「解決」や「落着」は決して見出されな

つたろう。

四 二葉亭は失敗の英雄

二葉亭は失敗の英雄であつた。小説家としては未成の巨人であつた。事業家としてドレほどの手腕があつたかは疑問であるが、事を侶ともにした人の憶おもい出でを綜合して見ると相当の策もあり腕もあつたらしく、万まんざら更な講釈屋ばかりでもなかつたようだ。実をいうと実務というものは台所の権助ごんすけ仕事で、馴れば誰にも出来る。実務家が自から任ずるほどな難かしいものではない。ところが日本では昔から法科万能で、実務上には学者を疎うとんじ読書人を

輕侮し、議論をしたり文章を書いたり読書に親したんだりするとさも働きのない低能者であるかのように輕蔑けいべつされあるいは敬遠される。二葉亭ばかりが志を得られなかったのではない。パデレフスキーも日本に生れたら大統領は魯おろか文部の長官にだって選ばれそうもない。ダンヌンチオも日本だったら義兵を募る事も軍資を作る事も決して出来なかつたろう。西洋では詩人や小説家の國務大臣や商売人は一向珍らしくないが、日本では詩人や小説家では頭から対あいて手にされないで、國務大臣は魯か代議士にだって選出される事は覺束おぼつかない。こういう国に二葉亭の生れたのは不運だった。小説家としても『浮雲』は時勢に先んじ過ぎていた。相当に売れもし評判にもなつたが半ばは合著の名を仮した春廼舎はるのやの声望に

由るので、二葉亭としては余りありがたくもなかった。数ある批評のどれもが感服しないのはなかったが、ドレもこれも窮所はらずを外れて自分の思う坪に陥ったのが一つもなかったのは褒められても淋しかった。『其面影』や『平凡』は苦辛したといつても二葉亭としては米銭の方便であつて真剣でなかった。褒められても貶けなされても余り深く関心しなかつたろうし、自ら任ずるほどの作とも思つていなかった。

正直にいったら『浮雲』も『其面影』も『平凡』も皆未完成の出来損できそこないである。あの三作で文人としての名を残すのは仮令たとひ文人たるを屑いさぎよしとしなくてもまた遺憾であつたろう。

結局二葉亭は日本には余り早く生れ過ぎた。もし欧羅巴だった

ら小説家としても相応に優遇され、二葉亭もまた文人たるを甘んずる事が出来たであらう。

（大正十四年一月『女性』一部登載）

青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷

底本の親本：「思ひ出す人々」春秋社

1925（大正14）年6月初版発行

初出：「女性」

1925（大正14）年1月号

※初出時の表題は「未完成の二葉亭」です。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2011年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

二葉亭追録

内田魯庵

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>